

入院中の幼児の遊び行動の実態と影響要因—健常時、外泊時と比較して

The actual condition and the influence factor of hospitalized children's playing

—the comparison with the time of healthy and the time of staying home from a hospital

東4階病棟 瀬戸恵美 若狭亜矢子 水野聡子 大曾契子
医学部保健学科 阪口しげ子

【要旨】

私達は、病棟での遊びの関わりを考え、遊びへの援助を見直すことを目的に入院中の遊び行動を調査し、影響要因を検討した。その結果、入院中の幼児の遊びには、おもちゃの内容や遊び相手、遊び場所が影響していること、看護師はそれらを考慮し、子どもの成長、発達が入院により妨げられないような遊びへの援助が必要なることが明らかになった。病棟でのおもちゃの購入や計画的な遊びの導入で取り入れていく。

【キーワード】

遊び 幼児 長期療養

I. はじめに

幼児にとって遊びは生活そのものであり、成長、発達には不可欠である。特に、入院中の子どもの遊びについて廣末¹⁾は「遊びは、不安への対処、非言語的コミュニケーション、自分自身で癒す過程の獲得などさまざまな機能があり、特有な体験に対処するために必要不可欠なもの」と述べている。入院中の遊びの必要性については他に多くの報告があるが、入院中の遊びを充実させるために健常時、外泊時の遊びと比較、検討し、遊びの援助に取り入れた報告は少ない。当病棟に入院する幼児のほとんどは血液疾患等で長期療養を余儀なくされているが、療養中看護師が設定した遊びの時間はなく、各自おもちゃを持参し、個々に、あるいは持ち寄って遊ぶ状況にある。私達は、入院中の遊びの実態を調査し、健常時、外泊時と比較することで何が遊びに影響しているのか傾向を明らかにして、入院中の遊びへの関わりを見直そうと考えた。本調査の目的は、入院中の遊び行動と影響要因を知り、遊びへの援助に生かすことである。

II. 調査方法

1. 調査対象及び期間

2003年12月に入院中の2歳以上の未就学幼児

2. 調査方法

アンケート調査—健常時、入院時、外泊時各1日の遊び行動について保護者に記入を依頼した。

3. 分析

回答を得たうち、6ヶ月以上入院経験のある4名について年齢ごとに検討した。

4. 倫理的配慮

保護者に研究の主旨を説明、承諾を得て実施した。

III. 結果

対象児の属性：全員男児で、3歳前後の未就園児3名（以下、A君、B君、C君）、6歳の就園児

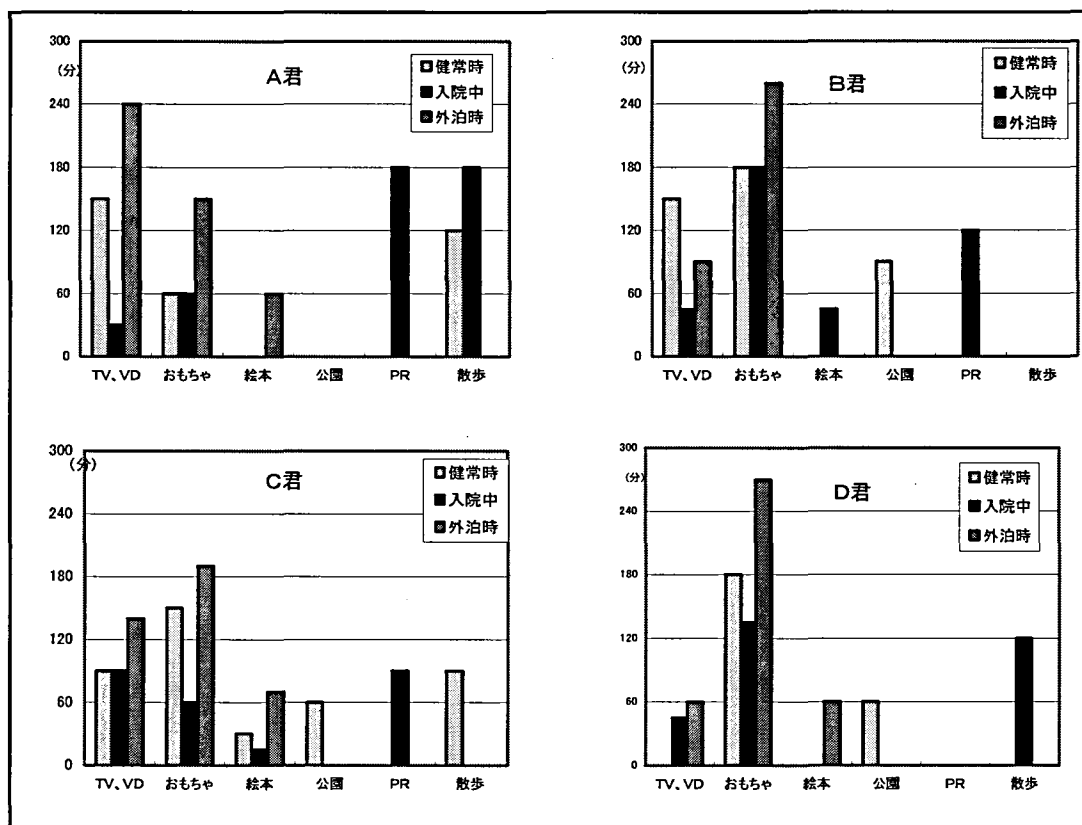
1名（以下、D君）であった。安静度はB君が制限なし、他の3名は病棟内であった。A君以外は兄弟がいた。入院中4名とも母親が付き添っていた（表1）。

表1 アンケート回答者の内訳

	年齢	性別	安静度	兄弟
A君	2歳8ヶ月	男	病棟内	なし
B君	3歳1ヶ月	男	制限なし	姉1人
C君	3歳2ヶ月	男	病棟内	兄1人、姉1人
D君	6歳2ヶ月	男	病棟内	兄1人、妹1人

1. 遊びの内容

4名とも入院時はおもちゃで遊ぶことが多く、病室外でもプレイルームのおもちゃで個々に遊んでいた。その他、病室内ではテレビ、ビデオを見たり、病室外では病棟内を散歩していた。外泊時は入院中よりもおもちゃで遊ぶ時間が増えていた。外泊中は屋内安静のため、室外遊びはなかった（図1）。



TV=テレビ、VD=ビデオ、PR=プレイルーム

図1 入院中、外泊時の遊び内容の比較

よく遊ぶおもちゃの種類は、入院前購入された物では楽器、乗用玩具、スポーツ玩具、人形等である。入院後購入した物では知育玩具、電子ゲーム、人形で、特にこの3つに集中している。入院後は安静度にあわせてベッド上で遊ぶおもちゃが購入されているが、遊んでいるおもちゃの多くは入院前から持っているものであった(表2)。

表2 よく遊ぶおもちゃの種類と購入時期

入院前購入

入院後購入

◎よく遊ぶ ○時々遊ぶ △ほとんど遊ばない

◎よく遊ぶ ○時々遊ぶ △ほとんど遊ばない

	A君	B君	C君	D君		A君	B君	C君	D君
楽器玩具		◎	○	○	楽器玩具				
乗用玩具	○	◎	◎	○	乗用玩具				
スポーツ玩具	○	◎	○		スポーツ玩具				
ままごと		○		◎	ままごと			○	
水遊び		△	◎	○	水遊び				
ミニカー	◎	○			ミニカー			○	△
大型遊具		○	◎	◎	大型遊具				
知育玩具				○	知育玩具	○	◎	○	
電子玩具			△		電子玩具		◎		◎
人形	○			◎	人形			◎	
ヒーロー遊び					ヒーロー遊び			○	
ブロック、積木		○		◎	ブロック、積木	○		○	

入院後購入したおもちゃの内容について4名とも、何らかの変化があった、と答えていた。A君、B君、C君は遊び方を考えて購入するようになり、B君、C君、D君はおもちゃの数が増えたと答えていた。A君、C君、D君は友達の影響でおもちゃを購入し、A君、C君は子どもの意見を重視する、D君は高価なおもちゃを購入するようになった、と答えていた(表3)。

表3 おもちゃの内容の変化

	遊び方を考え	数が多くなった	友が持ってい	子どもの意見	高価になった
A君	○	×	○	○	×
B君	○	○	×	×	×
C君	○	○	○	○	×
D君	×	○	○	×	○

おもちゃの数については入院後 100 個以上購入している児もいた (図 2)。

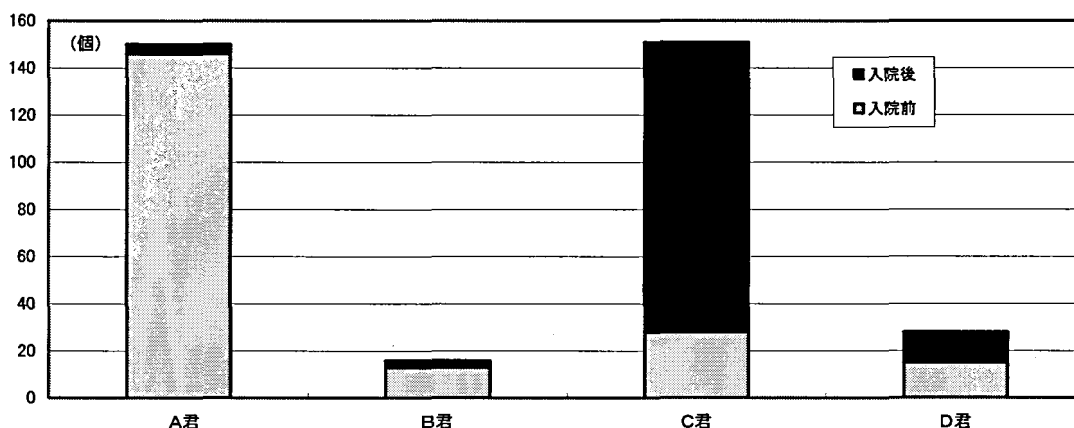


図 2 おもちゃの数

2. 遊びの時間

4名の遊び時間の平均は、健常時 6 時間、入院時 5 時間 40 分、外泊時 7 時間 10 分と、外泊時が入院時と比較してだけでなく、健常時と比較しても、最も多かった。C 君だけは健常時より入院時のほうが遊び時間が増えていた。年齢による差はみられなかった (図 3)。

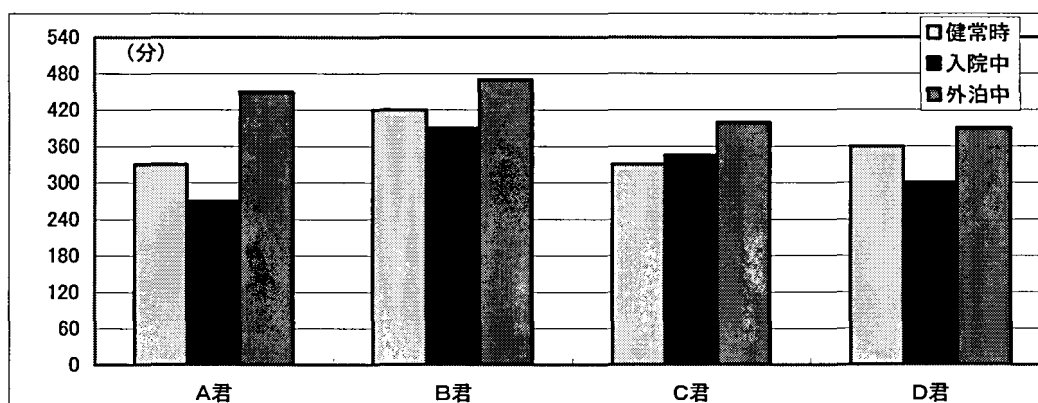


図 3 遊び時間

3. 遊び相手

入院中は母や友達と遊ぶことが多いが、外泊中は兄弟や父と遊ぶことが多く、母と 1 対 1 で遊ぶことが少なくなっていた。入院中の遊び相手に看護師と答えた者はいなかった (図 4)。

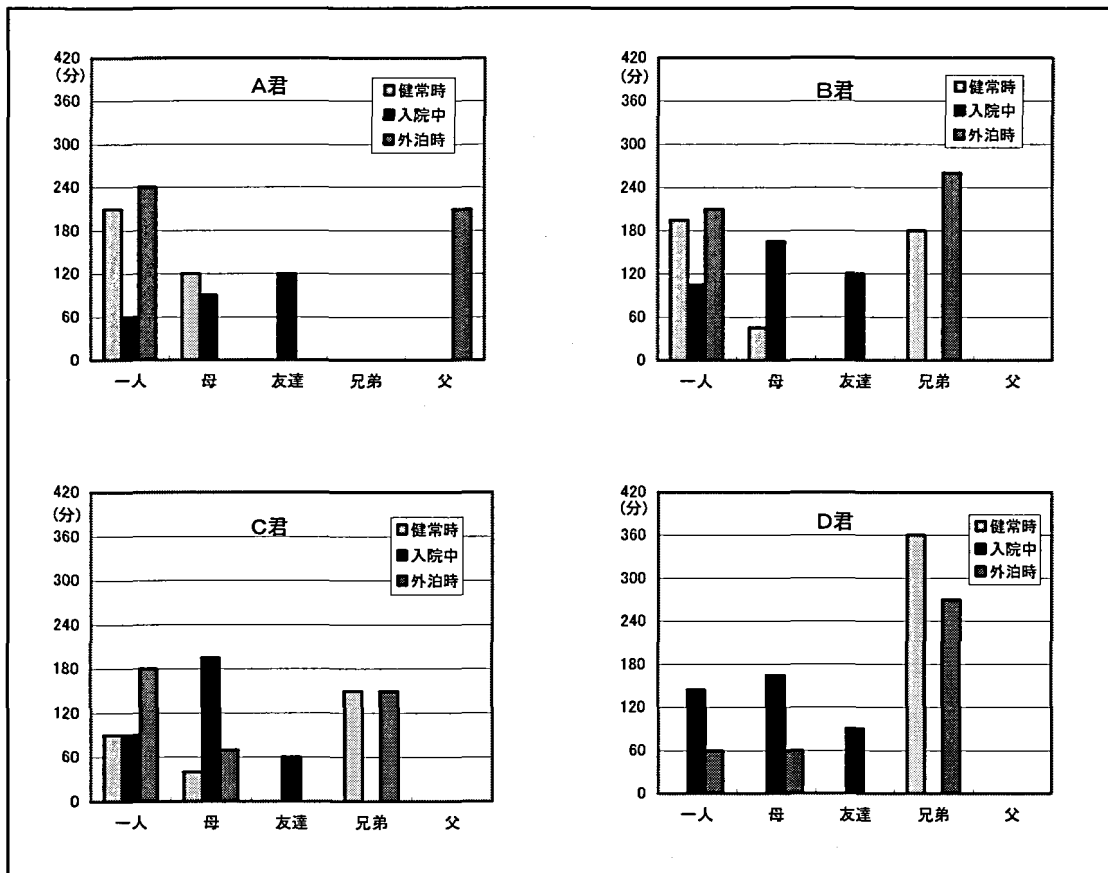


図4 遊び相手

IV. 考察

入院中の幼児の遊びは健常時に比べて種類が少なく、内容もあまり体を使わないおとなしいものであった。骨髄抑制による活動制限や点滴が遊びをそうしたものに変えてしまっていると思われる。子どもはおもちゃで遊んでいることが多いが、入院後に購入した新しい物より以前から持っていた物を用いることが多く、普段遊び慣れたおもちゃのほうが好まれる傾向にあった。本来、遊び慣れたおもちゃをそのまま使える事が望ましいが、病棟に持ち込めるおもちゃには制限がある。子どもの成長、発達を促し、健常時の日常生活に近い状況にするため、病棟に備えるおもちゃの内容は十分に検討する必要がある。外泊時における遊び時間の増加は、外泊がいかに楽しいものであるか分かる。外泊で家庭に帰ることは、入院中の幼児にとって健常時の遊びに触れられる機会である。しかし、長期療養を強いられている子どもにとっては家庭に帰ることは非日常的であると考えられ、外泊を「めったにない楽しいこと」として受け入れ、入院という抑制が外れて健常時以上の遊び時間の増加につながっていると思われる。家庭は子どもの生活環境が整い、発育するにふさわしい環境であることを考えると、外泊は大切なものである。子どもの身体状況は外出制限や内服、CV ライン等、健常時にはない状況での帰宅になるので、外泊時の遊びが健常時の遊びに近づくような援助が必要である。遊びの内容、時間、遊び相手において2、3歳児と6歳児の差はほとんどなかった。幼児期の成長、発達の面からみると、Weller²⁾が述べているように2、3歳児頃は言葉の発達が最も顕著であり、身体的

には次第に器用になってくるため、お話の時間を毎日設けたり、体を使ったエネルギッシュな遊びを取り入れる必要がある。6歳児では就学できる段階まで発達しているので、おもちゃがなくても伝承遊び（かくれんぼ、鬼ごっこ等）などで自分から進んで友達と遊べる機会を作る必要がある。また、運動性、社会性の発達を促すためにも、家庭で兄弟と遊んでいるように入院中も他の子どもと遊ぶ機会を増やすことが望ましい。藤井³⁾は遊びを、子どもの「不安やストレスを軽減」し、「年齢相応の発達を促進する」目的を達成する機会だと述べているが、病棟では入院による抑制のある子どもの成長、発達を考慮した遊びの援助は計画的に行われていなかった。病院でも家庭でも、幼児にとっては身近にいる者が遊び相手として重要な役割を果たすため、入院中子どもの身近にいる者は、子ども1人1人の成長、発達に見合った遊びを提供できるよう関わっていくことが大切である。そのために、入院中もおもちゃの内容や遊び相手、遊び場所を整え、家庭での遊びに近づくような援助をしていくことが必要であると再確認できた。

V. 今後の課題

今回は4名について検討しただけなので、今後さらに事例を増やししながら、プレイルームのおもちゃの購入に生かし、看護師が個々の発達段階をふまえてケアの中で遊びを意図的に取り入れるなど、病棟での遊びの援助をより具体的にしていく必要がある。

VI. まとめ

1. 入院中の幼児の遊びは種類が少なく、おもちゃで遊ぶことが多く、新しい物より遊び慣れた物で遊ぶ傾向にある。制限のある持込のおもちゃを補うために病棟に備えるおもちゃは、子ども1人1人の発達に合わせ十分に検討する必要がある。
2. 入院中の幼児にとって外泊で帰ることは、健常時にはない状況であっても家庭という日常に触れられる大切な機会であり、入院中もおもちゃの内容や遊び相手、遊び場所を整え、家庭での遊びに近づくような援助をしていかなければならない。
3. 幼児にとって身近にいるものが遊び相手になるため、看護師は入院中制限のある子どもの成長、発達を考え、関わりを充実させる必要がある。

引用文献

- 1) 廣末ゆか：入院中の遊びの必要性、小児看護 22(4)、P430～433、1999.
- 2) Weller.B.F. (鈴木敦子他、訳)：病める子どもの遊びと看護、医学書院、東京、1988.
- 3) 藤井あけみ：チャイルド・ライフの世界、新教出版社、東京、2000.

参考文献

- 1) 秋葉英則：小児期における遊びの意義、小児看護 22(4)、P426～429、1999.
- 2) 十枝内慶子、浅利淳子、野里妙子ほか：入院児への遊びの援助に関する検討—遊びの実状と看護婦の意識調査から—、第26回日本看護学会集録(小児看護)、P133～135、1995.
- 3) 北林外美栄、吉本瑞穂、森谷広美ほか：組織的な遊びを介して得た遊びの効果—室内安静を強いられる児への働きかけ—、第26回日本看護学会集録(小児看護)、P139～141、1995.
- 4) 牧洋子、井上恵美子、阿部智美：医療者の遊びへのかかわり、小児看護 22(4)、P434～439、1999.